学んだことを自然体で実践する学生は頼もしい

学生からの授業の感想文の中に、ある学生の次のような一文（抜粋）があった。

【　ついこの間、駅で車いすの男の人が近寄ってきました。
その人は話すことができず、タイプライターのようなもので「手をかして下さい」と話しかけてきました。
周りの人は、本当にびっくりするほどその人から距離をあけていました。
私も昔だったら同じような行動をとったと思います。
「リックをとって」、「おサイフ出してください」、「４００円」、「ありがとうございます」と。
自分でも初めての体験でした。
当たり前の事なんだろうけど、とても清々しい気持ちでした。
これは、この授業で学んだことによる変化だと思います。　】

こうした一文を目にすると、自分まで清々しくなる。

さて、自分の授業のモットーは「教えるでなく、育むこと」であり、最初の授業で「何も教えない。自ら考え、行動できる力を育む材料を提供するだけ！」と宣言しているほど。
また、「日頃から身近なところから勇気を持って実践に心懸けていないと、将来、真のプロに成り得ない。」とも語りかけ続けている。
幾らたくさんの知識を授けても、学んだ知識を周りの方のために応用する力（知恵）を自ら育まないことには、何の意味も持ちませんものね。

それだけに、学んだことを自然体で実践できるようになったこの学生は頼もしい。
こうした学生の存在を知ると、授業冥利につきるし、更に授業で語りかけることへの自信と勇気を貰える。

正に、「教育活動とは、相互輔生（あえて比べず、互いに輔け合いながら、生きるとはどういうことかを問い続ける活動：梅津八三．1976.）」ということか！

阿部幸泰　　（2007 年 8 月 26 日　記）